

人間動物園

人間動物園

ポケット文春 138

1964年10月20日 初版発行

定価 220円

著者 ^{くに}邦 ^{みつ}光 ^し史 ^{ろう}郎 ©

発行者 上 林 吾 郎

発行所 文藝春秋新社
東京都中央区銀座西8ノ4

印刷 大日本印刷
製本 大光堂

Printed in Japan

落丁乱丁がありました場合はお取りかえします

人間動物園

邦
光
史
郎

文藝春秋新社

目次

第一章	さまざまな密室	5
第二章	寝業師	41
第三章	金権候補	72
第四章	票読み	103
第五章	空中庭園	139
第六章	汚辱の館	169
終章	七月十日の太陽	201
	あとがき	209

裝
幀

金
森

達

第一章　さまざまな密室

一

湿度の高い七月の午後であつた。

白堊九層六十五メートルの高さをもつ国会議事堂は、一面にアルミ粉を振り撒いたような鈍光に包まれて、ひっそりと静まっていた。

閉会中なので、内部は空洞にひとしかった。

すりきれた赤い絨緞の廊下を、おそろおそろ踏んで、四、五人の男たちが見学に廻っていた。若い衛視が一行を案内していた。

高い階上の傍聴席から見下すゆえか、衆議院本会議場は、意外に狭くみえた。

議長席を中心にして、ぐるりと代議士たちの議席が半円の渦巻状に並んでいる。

「議長席から向つて右側が与党、左側が野党の議席です。各大臣たちをはじめ、実力者の方たちは、おおむね、最後列に議席をお持ちです」

つるつるした木製の手すりから、上半身をのり出すようにして、見学者たちは、議場を眺め

た。

昭和十一年十一月に竣工して以来、ただの一度も陽光を導き入れたことのない本会議場なのである。

だから、まるで瓶の底にたまった滓のように、悪気がよどんでいた。いや、それはただここが、閉じた空洞であるばかりではなく、政治というものが本質的に陰惨な取引であるゆえなのかもしれない。

真杉順は、急勾配になった傍聴席の一隅から、議席を見下した。

「あれですよ、秋津代議士の議席は」

衛視の指さす一点を、見学者たちは畏敬にみちた眼差しで凝視した。

「さすがは国会ですな」

「町会議場とはくらべ物にならんわい」

見学者たちは、国会議員バッジに似せて作った町会議員バッジを上衣の襟に佩用していた。

市町村会議員、県会議員、国会議員と、ピラミッド状に、階級づけられた、これが最高位の議場であり、議席なのだ。

本会議開催の振鈴が鳴ると、それぞれ自党の控室にいた代議士たちが、一斉に議場へ入ってくる。

議運のうるさ方は最前列にならび、それから議員歴の若い一、二年生がやや気負った姿勢をととのえて着席する。そのころになると、保守革新を問わず、大物連中が入場してきて、自席

の机上に倒してあった氏名標を一斉に立てるのだ。ぴしんと音のするほど勢よく名札を立てる人もあれば、ひっそり出席を示すための名札を立てて置いて、後ろの席の同僚と話し込んでいる議員もいる。

新聞の一面トップにいつも写真入りで報道される首相や大臣たちが、雛壇にならぶのを嫌って、いつの間にか最後列の議席についていたりする議会は、なんといっても最高の権威に輝く檯舞台なのだ。

現代日本を代表するトップクラスの人物たちが一堂に会して国政を司る、その豪華な舞台を、真杉順はありありと幻想した。

権力のない男たちが、たとえ国会動物園と揶揄したところで、そんなものは所詮犬の遠吠えにすぎない。

過去の政治家とくらべて、はるかに規模も人物も小さくなったと評されているが、それでも彼らが、国政を担う権力者である事実はずしも変わらないのである。

彼ら議員たちは、すべて自分たちが選ばれた人間であり、最高位の特権をもっているのだという誇りに胸を反らしている。

それは、保守党だろうが労働党だろうが同じことだった。

彼らの一挙手一投足によって国政が左右され、彼らは国民の上に君臨している権力者なのだ。むろん、政治を動かすためには、ありとあらゆる権謀術数がめぐらされ、いつの時代にあっても、政治の内部は暗く陰険なからくりにみちている。

真杉順は、そうした権力の裏面を知れば知るほど、被治者としての怒りと嫌悪を強く感じた。けれど同時に、その嫌悪感よりもまだ強い憧憬を覚えずにはおれなかった。

権力者を罵倒することはたやすいが、自分が権力者になろうと思えば、尋常一様的手段では到底なり得ないことが分ってきたからであつた。

彼は、権力者に憧れた。

それこそ、自分の背負っているありとあらゆるマイナスの札を、プラスに変えるただ一つの道であると思つたのだ。

政治家になつてやろう。

主義主張のためでもなければ、誰のためでもない、自分のために、彼は政治家になろうと考へた。

言い訳することは何一つなかった。

ただ自分の野心のために、彼は権力を得ようとしたのである。

なれるものなら最年少議員になつてみたいと思ひながら、真杉順はすでに二十八歳の誕生日を迎えてしまつた。

この議場に、いつかは自分の氏名標を立ててみせる。

はじめて議会を見学した時、彼はそれを、すぐ手の届く近い標的だと思つた。

けれど、いまでは、そんな日が果してくるのだろうか、自問自答しなければならぬほど希望は縮んでいた。

「ところで、秋津先生の書生さん」

反っ齒を剥き出した町会議員のリーダーが真杉の肩を叩いた。

「お蔭で、ええ土産ができましたけど、ことのついでに、出来たらもう一つ案内してもらいたいところがおますねん」

口中にたまった唾を鳴らしながら注文をつけてきたのである。

「どこでしょう？ 議員宿舎なら、これから御案内いたしますが……」

うるさい見学者なのだ。といって、代議士稼業にとつては、大事な票田の管理人たちであるから、なおざりには出来ない。

「いや、そういうお堅いところは国会だけでもう充分ですよって、こんどは一つ音に聞えた赤坂村を、話のタネに、見学させてほしおますのや」

「赤坂ですか」

「この前陳情団が案内してもろうた神楽坂でもかましまへんで」

それは、第二秘書にすぎない真杉の力にあまる注文であった。

「しかし、何分、いま先生は総裁公選前でお忙しい最中ですから」

「そらそうですやろ。そやなかったら、あの義理堅い秋津先生のことや、書生に案内させんと、御自分で案内してくれはりますかな」

町会議員は、はつきり真杉を書生と呼んだ。名刺には、小さく秘書と刷り込んであるが、彼らは齒に衣を着せない率直さで、書生に自分たちを案内させた秋津代議士の冷遇を詰ったので

ある。

真杉は、わずかに視線を落すことによって、屈辱感を振り捨てようとした。

「それで、一体、いま先生は、どこにいてはりますねん？ 党本部でつか？」

「分りません」

硝子で作った表情のように、真杉はしらじらしい顔を装った。

「分らん？ あんた秋津先生の書生やおまへんのか」

「先生の日程スケジュールは、第一秘書の栗橋さんが扱っております」

「さよか、そんなら、栗橋君に電話しとくなはれ」

町会議員連は、もう全く真杉を無視した態度で、国会見学を終った。

彼らの率直さは、むしろ愛すべき単純さといえるかもしれない。

しかし、真杉は相手から面と向って書生扱いされるごとに肋骨がしめつけられて痛むのを覚

えた。

侮辱には冷淡を返報するよりしかたがない。

彼は、正確に与えられた侮辱を相手に返そうとした。

それが自分にとって、いつも不利を招きよせるのだと百も承知していたが、やはり屈辱を我慢することはできなかったのである。

見学受付所へ戻ってきた時、彼は、赤電話で、八日会事務所に詰め切っている栗橋を呼び出した。

「なんだい、いまごろ？　こっちはいま作戦会議の最中なんだぞ」

三十八歳になる第一秘書は、すでに議員であるかのようにいつも振舞っていたが、この栗橋が、秋津大作の地盤を譲り受けて第一線に躍り出るのは、何年先のことか分ったものではない。「先生はおいですか」

「オヤジはいま幹部会が上ったところで、夕飯にでかけていったよ。今夜、奥さんがくるのは、第二こだまだったね？」

「九時着です。僕が迎えに参ります」

「そうしてくれ。こっちは夫人のお相手どころじゃないんだ。ところで、なんの用だね？」

「昭南町の議員一行が先生に面会を希望しておられます。いま、電話をかわりますから」

彼は、受話機を、町会議員にゆづった。

「では、これで失礼いたします。あとはどうぞ第一秘書と御交渉下さい」

呆気にとられている町議たちに向って、うやうやしく一揖すると、真杉順は、さっさと見学受付所を出ていった。

動かない熱気に包まれて、蒸風呂のように暑い戸外であつたが、真杉はむしろその暑い夏に生理的な快感を覚えた。

俺は権力の周辺に群り集ってくる人間が嫌いだ。自分も彼らと同じように、権力者のおこぼれを拾うことに汲々としているのかと考えると、なおさら彼らに虫酸が走った。

俺が権力者の位置に憧れるのは、いずれ権力の残滓を漁って生きねばならないのなら、いつ

そ権力者そのものになってやれと考えたからかもしれない。

真杉順は、どうかして一足とびに階段をとびこえて、権力の座に飛躍できないものだろうかと思った。もう彼は権力者に奉仕する自分の日常に飽き飽きしていた。ぐるぐる赤い日輪が目くるめく早さで廻っているような七月の午後に向って、彼は目を外らさずに歩いていった。

二

官庁街をすり抜けて、黒い車体の中型車が虎ノ門に向っていた。

黒っぽい感じの紺色夏背広に、きちんとネクタイをしめた、五十年配のやせた男がひとり、シートに背を凭せかけて瞑目をつづけている。

瘡せているといっても、かなり大柄な男なのだ。瘡せたのは最近のことであるらしく、いわばだぶついた服を身にまとっているように、張りを喪った皮膚が骨格の上にかぶさっていると言った方がよいかもしれない。

どこかに精気のない疲れがただよっていた。

頭を垂れるようにして、議員バッジを襟につけた男は、揺られていった。

菊花を赤色のビロードで包んだバッジなのである。

赤色は衆議院議員、参議院議員ならビロードの色は紫と定められている。

当選五回、党県連副会長、党政調審議委員、大蔵省財務局長、通産省政務次官、東大経卒、滋賀県出身、五十七歳。

それが、秋津大作の略歴であった。

いつもは、真杉に運転させて、国産中型車を乗用しているのだが、いまはタクシーを利用していた。

行先を、あまり他人に知られたくなかったからである。

虎ノ門の裏通りで、車を捨てた。

橙色に染った夕空を背景にして、その一角には大小のビルがひしめき合っている。秋津は、棒を立てたようにたて長いビルの玄関口にみえている自動エレベーターに乗り込んだ。

平面を動き廻る鉄の密室から、立体的に上下動する別の密室にとじこもったのである。

五階で、彼はおりた。

奇妙な明るさをもつ廊下であった。

そう言えば、水族館に似ているようだと思つた。

通いなれた足取りで、小木メ^{おぎ}ディカル・センターと記された不透明ガラス扉の前に立つと、ベルを押した。

ひっそりと静かな廊下だが、ふだん多忙な日常を送っている男は、ほんのすこし待たされただけで、もうじりじりした。

靴音が近づいてきて、扉が開いた。

いつもの女性職員が、慇懃な態度で迎え入れてくれた。

「お待ち申し上げりました」

扉の内部は、ロビーになっている。

丸テーブルを中央にして、ソファと数脚の肘掛椅子が配置され、壁には、五十号ほどの抽象画が懸^{タナロイ}つていた。

その絵画を一瞥するたびに、秋津は、ある不安定な情緒の揺曳を覚えてならないのだ。あるいは、安定した情緒を掻き乱されると言い換えてもよい。

感覚的なアブストラクトなのである。

甘美な闘争を、そのタブローは表象していた。

“貪^{カモフラ}る愛” もしくは、“スワサン・ヌーフ” と題されていることを、秋津は知らなかったのである。

むしろ彼は、この絵画が、政治的な対立を意味しているのではあるまいかとひそかに疑ったことがあった。

けれど、この絵をみて、いら立ちを感じる時は、氣力の衰弱を示し、それ程意識に上つてこない時は精気にみちた状態の時だという、一種の計測器^{バロメーター}の役目を、これが果しているのだとは、察していた。

右手の扉が開いて、水色の制服をまとった女性が、にこやかな表情で、盆を運んできた。

「粗茶でございます」

一礼して、彼女は引き退った。

手にとると、薄手の湯呑みが、持ちにくいほど熱くもなく、かといってぬるすぎるほどでも

ない緑茶の上に、淡紅色の花弁をもつ蘭花がひとつ、ひっそりと開いて浮んでいた。

蘭の花の塩漬けが浮べてあったのだ。

緑茶の香気に、蘭の花がさわやかな艶めきを添えていたのである。

それが会員制診療所の性格を暗示していた。

五百名の会員を一応の限度としていて、会員外の診療は一切受け付けないことになっている。むろん保険証は通用しなかった。入会費二十万円、治療代はどれ程高くついても即座に応じられる高額所得者でなければ、入会の資格がない。

そのかわり、ありとあらゆる最高度の治療が受けられた。しかも、一切は秘密厳守であり、会員制のクラブにも似た豪華なサービスを受けることができた。

一般病院にあり勝ちな陰惨な感じ、消毒薬の匂い、患者を実験動物並みに扱う横柄な医者の態度、治療するよりも医術の權威を守る方がより大切であるという医学界全体の權威主義、そうした鼻持ちならない医者と病院の尊大な精神は、この小木メディカル・センターには全く無用のものであった。

患者は王様であり、医師と看護婦は、その奉仕のために存在する。

病院は、屠殺場ではなくて、憩いの樂園でなくてはならない。

われわれは健康管理医であって、いわば健康という最高の美の奉仕者である。

小木メディカル・センター設立の趣旨は、そのように謳われていた。

そして、そのほとんどの会員は、政界、財界、芸能界に属する名士ばかりであるということ